# バカとハルヒと宣戦布告

メイル・シュトローム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
バカとハルヒと宣戦布告

【Ｎコード】
Ｎ９１３４Ｏ

【作者名】
メイル・シュトローム

【あらすじ】
いつものように不思議な事に手を出すＳＯＳ団が目を付けたのは…

## 第1話　始まり

キョン
「ハァー」

ハルヒ
「どうしたのよキョン」

キョン
「何故俺達は不慣れなテストを受けなきゃいけないんだ」

ハルヒ
「ハァー、だからキョンはいつまで経ってもダメキョンなのよ」

キョン
「俺がダメなのはわかっているから理由を教えてくれ」

ハルヒ
「キョンと話してたらきりがないわ。…まぁいいわ、テストを受ける理由は…面白そうだからよ！」

やっぱりそうか、まぁ今に始まったことじゃないしな、そこら辺は目をつむるとするか。

そうしている間に次のテストが配られてくる。

今はとりあえず目の前にあるテストを片付けていくか。

この後はカリカリという擬音語だけが耳に聞こえた。

## 第2話　確定

事の始まりは文芸部室の中で言ったハルヒの一言で始まった。

ハルヒ
「皆、明日の朝9時に駅前に集合よ」

いきなり過ぎるなオイ！

キョン
「ハルヒ、理由は何だ？」

ハルヒ
「不思議探索よ、今回は県外で探すわ」

キョン
「いつもは灯台もと暗しとか言って近所だったじゃないか。何でいきなり遠出するんだ？」

ハルヒ
「キョン、あたしはね…ありきたりなのはイヤなのよ！」

キョン
「古泉、教えてくれ」

とりあえず隣りにいる古泉に話しかけた。

古泉
「なに、言葉道理の意味ですよ。彼女はとりあえず遠出をしたいの

ですよ」

そうとわかれば話しは早い、明日に備えて早く家に帰るだけだ。

キョン
「ハルヒ、そうするとおごりの分はどうするんだ？」

ハルヒ
「それは電車賃をキョンが払うのよ。はい、話しは終わり、明日に備えてグッスリ寝なさい」

ふむ、必然が確定になっただけか。

さて家に帰るとするか。

## 第3話　到着

翌朝。

俺のおごりのもと電車に乗って出かけていった。

駅を乗り継いだりして2時間程たった頃、ようやく下車した。

帰りもこれだけ使うのかと思っていたら……

ハルヒ

「ほら早くしなさい。モタモタしてたらバスが出発しちゃうでしょ」

キョン

「待てハルヒ、バスに乗ると帰りの電車賃が足りなくなる」

キョン

「何してるのよキョン。そんなにいつも浪費しているから肝心な時に足りなくなるのよ」

その浪費の元は月に三度も集合をかけるお前へのおごりだよ！

ハルヒ

「仕方ないわね、バス代は古泉君、あなたが払ってちょうだい」

古泉

「……わかりました」

自分が払うという選択肢はないらしい。

バスで３０分程揺られて降りたバス停の近くに、北高の比ではないとても大きな学校があった。

校門には学校名がかなり大きくこう記されていた。

「文月学園」

## 第４話　乗り込み

キョン
「…ハルヒ」

ハルヒ
「何、キョン？」

キョン
「最初からココが目的か？」

ハルヒ
「そうよ、ココをＳＯＳ団第５支部にするわ」

第５か…５？

キョン
「ハルヒ、３と４がわからないがドコだ？」

ハルヒ
「３は喫茶店、４はあんたの家よ」

キョン
「そうか、ココの教師と生徒はどうするんだ？」

ハルヒへのツッコミは理由がなんとなくわかるからほうっておく。

ハルヒ
「支部長と支部員にするわ」

キョン
「明らかにお前より立場が上の奴は？」

ハルヒ
「私がさらに上にいけばいいのよ」

キョン
「人権はどうするんだ」

ハルヒ
「そういえばそうね、有希何かいい案ある？」

人任せか、それにそういえばって…まぁ長門なら第５支部を作らないいい案でも……。

有希
「…試召戦争」

おぉ！その手があったか、ハルヒも戦争で負ければ文句は言えまい。

みくる
「せ、戦争ですか」

悪いが今は朝比奈さんの期待には添えない。

ハルヒ
「…そうね、じゃあ早速校長室に乗りこむわよ！」

ハルヒも全力で無視した。

そしていよいよ校舎の中に踏み込んだ。

一応念のため言っておくがスリッパに履き替えたからな。

## 第5話　交渉

校舎に入って5分くらいたった頃ようやく校長室の前に着いた。
さすがは土曜日ここまで1人も出会わなかった

《コンコン》

ハルヒがドアを叩く。

学園長
「入りな」

ドアの向こうから声がするどうやらちゃんといるようだ。

ハルヒ
「失礼します《ガチャ》」

ハルヒも真面目モードだ。

学園長
「おや、見ない顔だね。誰だいアンタ達は?」

ハルヒ
「SOS団団長涼宮ハルヒ。我々は文月学園に試召戦争を仕掛けます」

いきなり本題かまぁそれがハルヒだがな。

学園長
「いったい何を賭けるんだい？」

ハルヒ
「我々が勝ったらここＳＯＳ団第５支部にします。負けたらそこにいる団員その１のキョンに１年間雑用係りをさせます」

…はい？

学園長
「残念ながら間に合ってるよ」

いるんだ…

ハルヒ
「ではアナタが決めて下さい」

学園長
「そうさねぇ…アンタ達の中に機械いじりの得意な子はいるかい？」

ハルヒ
「有希がいます」

学園長
「その子に１年間開発の手伝いをしてもらうってのはどうだい？」

ハルヒ
「いい、有希？」

コクリ

ハルヒ
「わかりました。その条件で…あと戦争のルールをある程度こちらで決めさせてはくれませんか？」

学園長
「…いいだろう好きにしな」……

……ハルヒ
「では1ヶ月後」

## 第6話　自習

2日後　月曜日

タタタタタタタ。

明久
「やばい、早くしないと遅刻だ！」

僕は全速力で校門に飛び込んだ、その先に鉄人が……いない？

明久
「まさかもうＨＲが始まって…よけいやばいじゃん！！」

ダダダダダダダ！
ガラッ！

明久
「すいません遅れました！」

鉄人？
「遅いぞ吉井、バケツを持って廊下に立ってろ」

明久
「古典的だ…って秀吉か。おはよう秀吉、鉄人は？」

秀吉
「おはようじゃ明久、鉄人なら緊急職員会議で会議室のはずじゃぞ」

雄二
「しかも午前の授業が全部自習になるおまけ付きのな」
自習か…自習となると……。
翔子
「…雄二、一緒に勉強」
美春
「お姉様～美春と一緒にお勉強いたしましょう」
雄二、美波
「うわっ！？」
…やっぱり？
明久
「まぁいいんじゃない、みんなで勉強しようよ」
美波には悪いけど、霧島さんの犠牲になってもらう。
雄二
「明久てめぇ？」
美波
「ア～キ～？」
翔子
「雄二、吉井はいい人」

美春
「今だけはブタ野郎を返上してやりますわ」

とりあえずこれで昼休みまでは勉強しなくて済むな。

さて、昼ご飯はどうやって断ろう…。

そんな考えを巡らせながら時間は午後へと移っていった。

## 第7話　昼休み

瑞希
「…あ、そろそろお昼ですね」

ウッ。

瑞希
「翔子ちゃんも一緒に食べますか？」

雄二
「さらばだ」

ガッ。

翔子
「…どこ行くの雄二？」

雄二
「…えっとギャァアアア！！質問したなら答えを待てぇぇぇ！！」

素早く雄二を処刑した霧島さん、僕の場合は美波だけど…。

美春
「お姉様、私と一緒にお昼ごはんを…」

美波
「いやよ、美春」

美春
「まだ言い終わって…」
美波
「ウチはアキ達と一緒に食べるから」
美春
「なら私も一緒に」
美波
「…仕方ないわね」
あ、犠牲者が増えた。
だけど今なら！
ダッ！
ガッ？
明久
「み、美波？」
美波
「アキ、どこ行くの？」
考える暇はない、とにかくやられる前に答える。
明久
「久保君のところ」

……。

…みんなから表情と言葉が消えた、何か選択を間違えたみたいだ。

誰も動けずにいたら…。

ガラッ。

鉄人

「全員すまないが昼と午後の授業を使って全校集会だ。今すぐ体育館に集合」

雄二

「翔子、そうみたいだからＡクラスに戻れ」

美波

「美春も戻りなさい」

翔子

「わかった」

美春

「仕方ありませんわ」

しぶしぶと戻る二人。

鉄人

「よし全員そろったな……逃げるなよ」

そこまで言われなくても逃げるわけがない、何故なら…

…授業が潰れたから。

でも集会自体が珍しいので少なくとも耳は傾けるからあまり心配ないけども、一体何があったんだろう？

隠蔽主義のババァが集会、それも全校とは…。

そんな疑問を残して僕らは体育館についた。

## 第8話　全校集会

ザワザワザワザワ。

学園長
「……うるさいよ黙りなクソガキども」

これだけの人数だ、そう簡単に全員黙るのは難しい。

……特に僕らFクラスは。

鉄人
「黙れ」

……。

どうやら鉄人の威力は1年生にも知れ渡っているようだ。

学園長
「早速だが本題に入るよ、あんた達もこの学校の生徒なら試験召喚システムがあることぐらい知ってるさね」

一体あのババァは何を話す気なんだ？

学園長
「一昨日そのシステムを使って試召戦争を仕掛けて宣戦布告した奴らが来たさね」

ザワ……ザワ……ザワ……。

明久
「…雄二、コレってまさか…」

雄二
「ああ、そのまさかだ」

明久
「ついに他校生が秀吉を狙って来たんだね」

雄二、秀吉
「それは絶対に違うと思う（のじゃ）が！？」

学園長
「うるさいよガキども！」

鉄人
「静かにしろ」

……。

学園長
「ったくこれだからクソガキ共は…面倒だから詳しい事は後でプリントで渡すさね。はい終わり、さっさと教室に戻るさね」

な、なんて自分勝手なババァだ、でもコレで早く家に帰れ……

鉄人
「お前たちには今のプリントを渡す前に補習プリントをやるから帰るのはその後だぞ」

……当分家に帰れそうにない。

## 特別ルール

ＳＯＳ団ＶＳ文月学園
試験召喚戦争ルール

・この戦争は他校の生徒との交流試合である。

・この戦争は大将撃沈型でなく全滅型である。

・この戦争はＳＯＳ団が全２０試合を全勝した場合のみ勝ちとし１敗でもした場合文月学園の勝ちとする。

・文月学園の２０チームは
１～３学年の各６クラス
全１８クラス
教師チーム
生徒＋教師混合チーム
の２０チームである。

・対戦順はＳＯＳ団が決める。

・試合中は回復試験を受ける事は出来ない。回復試験を受ける場合は試合と試合の間に受ける事。

・試合は毎週１試合、金曜日の放課後に行う。

・試合開始までは全員所属クラスの中、ＳＯＳ団は体育館の中にいること。

・試合に参戦していない生徒は試合を観戦してもよい。ただし助言や妨害、観戦者同時の会話等で試合に影響する行為をした場合補習室へ送られる。

・その他の細かいルールは通常のルールに従う。

・なお負けた側の人達は多少の人権が侵害されることがある為心して望むように。

# 第9話　感染

1ヶ月後　金曜日

ハルヒ
「やっとこの日がきたわね」

今日は文月学園との初戦だ。
現在森さんが運転している車で向かっている最中だ、何故？とツッコミをいれたいが今はそんな暇はない、何故なら……

《古泉
『……あなた、まさか例の世界を忘れていませんよね？』

キョン
『……ああ、忘れていないぞ』

古泉
『……その長い間は無かったことにします』》

……という訳だ。
流石に数百人もの人達に迷惑をかける訳にはいかないので必死に打開策を考えているが全く思いつかない。
車というのは速いもんだ、もう校舎が見えて来た。

森
「到着しました」

ハルヒ

「さぁみんな、張り切っていくわよ！」

４人

「……」

ハルヒ

「みんな『行くぞー！！』とか『オー！』とかなんか言いなさいよ！」

４人

「……オー（棒読み）」

ハルヒ

「キョンは後で罰ゲームね。じゃあ入るとしましょう」

なんで俺だけ……。

まぁここまで来たら好奇心のみで出来たハルヒ菌にやられた俺の頭は考えをこうまとめた。

取りあえず今日の試合に勝てば後一週間考える時間が出来る。

楽しそうだしハルヒが変に暴走しなければ作戦しだいで多分勝てるかもしれないから頑張ってみるか。

## 第１０話　緊張ｄｏｗｎｕｐ

体育館にて。

高橋女史
「では全員揃いましたね」

一人を除いて全員が頷く。
理由は目を潰されて悶えているから。
それを見た人達の反応の見た限り、どうやら向こうの２年は理不尽に耐性があるらしい。

ちなみに全員というのはＳＯＳ団５人と各クラスの代表だ。
２、３年の代表はクラスで一番成績が高い人、１年はクラス投票で選ばれた人らしい。

高橋女史
「ＳＯＳ団の皆さん、対戦チームを選んで下さい」

ハルヒ
「では……モゴッ」

キョン
「すみませんまだ決めていないので５分程時間を下さい」

高橋女史
「５分ですね、わかりました」

先生が時計を見始める。

ハルヒ
「ちょっとキョン、何邪魔してるのよ！」

キョン
「お前なら『全員一度にかかってきなさい、まとめて蹴散らしてあげるわ！』とか言いそうだからな」

ハルヒ
「何よ、悪い？」

言う気だったのか。

キョン
「悪いな」

ハルヒ
「……ならアンタの意見を聞こうじゃないの」

キョン
「俺としては召喚獣の扱いに早く慣れたいと思っている、点数が低くても召喚獣の動きしだいで5、6倍の相手と同等に戦えるらしいからな。だから最初の内は1年のみを相手にして慣れたいんだが」

ハルヒ
「……キョンにしては随分とまともな事を言うわね」

キョン
「俺も勝ちたいからな」

高橋女史
「時間です。それでは改めて対戦チームを」

ハルヒに届いていればいいけど……。

ハルヒ
「……まずは……

……1－Aから相手して貰うわ」

なんとか届いたようだ。

高橋女史
「では所定の位置について下さい、5分後に鳴らすチャイムで開始です」

# 第11話　オリ名公開

キーンコーンカーンコーン。

始まったか。

ハルヒ
「行くわよみんな」

キョン
「ああ」

5人固まって校舎の1階に入る。
俺達の作戦はこうだ。

なるべく離ればなれにならずに行動して出て来た相手は逃がさず倒す。
味方の残り点数もわかり援護も出来る少人数ならではの作戦だ。

俺の点数
朝比奈さんの操作
ハルヒの暴走

少なくともこの3人は絶対1人になってはいけない。
なら援護してもらう為に長門と仕方なく古泉も同行してもらうということだ。

ハルヒ
「来たわよ」

あれは確かクラス代表の工藤瞋恚だ。

（たぶん）英語の遠藤先生と総合の高橋先生を連れている。

ハルヒ
「１人で十分だという訳？」

瞋恚
「いえ、確認したい事があるので他の人に頼めないだけです。遠藤先生」

遠藤先生
「わかりました」

遠藤先生の周りにフィールドが広がる。

６人
「試獣召喚」

全員の前に８０ｃｍ程のデフォルトされた召喚獣が現れる。

英語
工藤瞋恚　１８６点
ＶＳ
涼宮春日　５９１点
古泉一樹　２０８点
長門有紀　７４１点
朝比奈未来　１３２点
鈴木僵尸　７０点

ハルヒと長門の点数が大きく飛び抜けている。

工藤瞋恚も半歩程後ろに下がる。

……少し間が出来たから装備の確認をしておくか。

さて、装備はっと……

工藤瞋恚
武器　鎌二本
防具　鎖かたびら

ハルヒ
武器　１５０ｃｍ程のハンマー
防具　金の鎧

古泉
武器　赤い砲丸
防具　赤スーツ

長門
武器　星のステッキ
防具　魔法のローブ

朝比奈さん
武器　ピコピコハンマー

防具　メイド服

俺

武器　ハリセン

防具　布の服

……全員の特徴がよく出てるな。

## 第１２話　プランＢ

瞋恚

「……っ！」

工藤がいきなり特攻を仕掛けてきた！？

いち早く反応した３人、ハルヒと古泉が攻撃を仕掛ける（長門は２人の後ろで待機）が……。

ハルヒの大振りはかわされ古泉の投げた球は鎌使って軌道を変えた。

あいつ本当に初心者なのか？

そのまま２人を後にして俺と朝比奈さんに向かって召喚獣を動かしてきた。

その途中で長門がステッキで連撃をする。しかし、打撃用の武器でないからか点数のわりに威力が随分低い。

工藤は落ち着いた様子で長門に攻撃するも屈んでかわされ帽子に当たり帽子がハルヒの方に飛ぶ。

長門の召喚獣は立ち上がって敵に攻撃……

……せずに帽子を取りに行った。

英語

工藤瞋恚　１２点

かなり減ったがそれでも俺と朝比奈さんに向かって攻撃を仕掛けてきた。

２人共自分の武器を使ってうまくガードして工藤は高橋先生と共に走り抜けた。

工藤と高橋先生の方に目を向けると階段から１－Ａと思われる３人で現れ

３人

「試獣召喚！」

英語

音無庄輝　３４８点

無笠陽平　２８７点

無藤和弥　４１２点

何とも高い点数を繰り出してきた。

奥で高橋先生がフィールドをつくり

瞋恚

「試獣召喚」

総合

工藤無愛　２４５９点

何故か召喚獣を出して

瞋恚

「全員に言う、作戦はプランBだ！健闘を祈っている！」

3人＋a

「了解！」

工藤はそう伝えると高橋先生に礼をして階段を駆け上って行った。

俺は後ろを向いて3人が来た事と新たな敵がこない事を確認して目の前の3人に向かって行った。

## 第１３話　ピンチ

古典
羅山波部間　０点
ＶＳ
涼宮春日　５７９点

波部間
「くそっ」

キョン
「……長門、あと何人だ？」

長門
「……９人」

戦争が始まって３０分ちかく「……３４分５１秒」……たった。
それぞれが自分の得意な教科で待ち構えているので俺がまだ残っているのは長門達のおかげだ。

キョン
「まだ戦ってない教科は？」

長門
「……数学と総合」

キョン
「ハルヒ、どっちを先にやるんだ？」

ハルヒ
「総合は腕輪がつけられないみたいだから総合にするわ」
最後は派手に決めたいのか……やっぱりハルヒは「何ジロジロ見てるのよ？」

キョン
「……別に。長門、数学の先生に会わないように総合の先生のところに」

長門
「……了解した」……

……キョン
「……8人か」
単教科が4、5人だったからか多く感じる。アレ以降工藤瞋恚は見ていない、数学が得意科目なんだろう。

ハルヒ
「……じゃあいくわよ」

１３人
「試獣召喚！」
総合
朝霧静香　２１５４点
喜浦保仁　２０２６点
瀬川瑛子　２０２４点
田畑靖枝　２５２１点
名倉留美　１６３７点
浜北慶　１５２９点
松江里佳　２６５５点
稿炉留　４１９３点
ＶＳ
涼宮春日　４０８０点
古泉一樹　１２８３点
朝比奈未来　１０６４点
長門有紀　７６８９点
鈴木僵尸　５１４点
……

……おかしい、少なくとも総合は４桁あったはずだぞ。

古泉
「……どうやら単教科のダメージがそのまま影響してるようですね。
コレだと逆もまた……」

ハルヒ
「来たわ！！」

8人が編隊を組んで（稿→俺、古泉、朝比奈さん）（喜浦、瀬川、名倉、浜北→ハルヒ）（朝霧、田畑、松江→長門）仕掛けてきた。

……初っぱなから凄いピンチだ。

## 第１４話　一人足りない

……

総合

朝霧静香　２４１点

田畑靖枝　５８４点

松江里佳　６５点

ＶＳ

長門有紀　３２１５点

喜浦保仁　１２６８点

瀬川瑛子　９４６点

名倉留美　７２点

浜北慶　９０点

ＶＳ

涼宮春日　１４９３点

稿炉留　３８２６点

ＶＳ

古泉一樹　２２３点

朝比奈未来　１６点

鈴木僵尸　０点

ハルヒ

「ちょっとキョン！何勝手にやられてるのよ！」

キョン

「仕方ないだろ、ダメージの量が桁違いに多かったんだから」

ＲＰＧ序盤並みの防具と数字だからかすり傷も致命傷になりかねない。

布の服より弱い装飾が知りたい。

それにしても長門が随分と苦戦している。
単教科ではメラ〇ーマやマ〇ャドを使っていたから威力の低い打撃で戦っているのを見るとたとえ勝っていてもそう見える。

総合
朝霧静香　０点
田畑靖枝　８１点
松江里佳　０点
ＶＳ
長門有紀　２９３６点

喜浦保仁　２０９点
瀬川瑛子　４３０点
名倉留美　０点
浜北慶　８点
ＶＳ
涼宮春日　９２５点

稿炉留　３７８４点
ＶＳ
古泉一樹　０点
朝比奈未来　０点

ほぼ同時に５人……６人が倒れて長門は稿と対峙した。

この試合はギリギリだが勝てそうだ……。

……まだ一人いたな、勝てるのか？この試合。

## 第１５話　これは……

総合

喜浦保仁　０点
瀬川瑛子　０点
浜北慶　０点
ＶＳ
涼宮春日　７４点

稿炉留　０点
ＶＳ
長門有紀　２４５点

炉留
「あ～あ、あともう少しだったのに～」

とりあえず総合科目は勝てた、けどこの点数だとかなり危ういだろう。

ハルヒ
「さぁとっとと大将とるのよ！有紀、案内して、全力で！」

なっ、全力ってハルヒ、お前ついていけないだろ！？てかもう行ってるし！

キョン
「古泉、朝比奈さんを」

返事を待たずにハルヒを追いかける。

工藤の点数が気になるが応援すれば少しくらいは勝てる確率が高まるかもしれない。

そんな事を考えている内にハルヒを見失った。

……さっき長門がよけたここか……いた！

点数は……

数学

工藤瞋恚　０点

ＶＳ

涼宮春日　９点

長門有紀　２７点

キョン

「ハルヒ、勝てたんだな」

ハルヒ

「……キョン。違うわ」

何だろうか、いつも俺に向ける呆れた視線より深い同情の視線を工藤に向けていた。

キョン

「勝てたんじゃ無かったら何なんだ？俺には勝ったようにしか見えないんだが？」

ハルヒ

「……キョン、相手の召喚獣をよく見なさい」

よく見る？意味が分からないがとりあえず見るか……

数学

《1－87クラス》

工藤瞋恚

０点

……１－Ａのクラス代表が一人だけクラス替えをしたらしい。

そして１年生は英文字では足りないほどたくさん生徒がいるようだ。

キョン

「……つまり、解答欄を間違えて記入したのに気付かずに０点になって」

ハルヒ

「０点の召喚獣を出して自滅したのよ」

そりゃハルヒも同情するわ。

## 第１６話　……略（笑）

それから省略して

ハルヒ
「トドメッ！」

腕輪が光り、ハンマーに付いているロケットブースターが噴射する。
そして召喚獣が砕け散る。

古文

高城一哉　０点
ＶＳ
涼宮春日　５１２点
古泉一樹　１１４点
長門有紀　６７２点
朝比奈未来　２３６点
鈴木僵尸　１１８点

おおー勝った勝った、これで後４試合か……

そろそろ真面目に回避策を考えないとな。

一哉
「…まいったな。ここまで強くなるとは、ちょっと油断してたな」

それは俺も同感だ。何せ俺を含め全員生きて勝てるようになったんだからな。

なんだろう、他の試合がどうたらとか聞こえた気がしたが気のせい……ん、なんだ紙か……作者の実力を思い知ったか……

……何のことだ？

高橋

「終戦直後ですみませんが、来週の対戦相手は決まっていますか？」

総合で終わったからか高橋先生が聞いてきた。

ハルヒ

「……じゃあ、２－Ａでお願いします」

とりあえず次の２－Ａの試合に備えて点数をためるとしよう。

## 第17話　気づけ

一週間後

17戦目の2ーA戦が始まった。

ハルヒ
「みんな、ここから更に強くなるみたいだから気をつけていくわよ」

そう、長門によるとこの2クラスは試合数が多く、科目のスペシャリストが他クラスに比べ沢山いるらしいから油断が更に出来ないようだ。まぁ俺は油断できる程の気持ちに余裕が無いから焦るだけだな。

俺達が階段前に来た時、

知的眼鏡
「来ましたね」

眼鏡をかけた男子が言う。

近くにいる先生は……田中先生、教科は世界史か。というかもしかして全員集合してないか？

ハルヒ
「ええ来たわ、時間が勿体ないから早く始めましょ」

知的眼鏡
「そうですね、始めましょうか」

５５人

「試獣召喚！」

５５人の召喚獣が現れ……

なかった

多過ぎて溢れてしまった。

# 第１８話　先制攻撃

世界史

相原葵　３９８点
江西万智　４６９点
太田祐樹　４５４点
笠松輝　３２５点
木田大地　３４５点
久保利光　４５２点
佐藤美穂　３６４点
飯島卓也　３０９点
紺野洋平　３１３点
森兵恵　３２１点
藍原和水　４２７点
蒲生寿輝　４１９点
曾山欄　４４６点
田畑栄旬　４６８点
東陶仄　５０１点
ＶＳ
涼宮春日　６１０点
古泉一樹　２８９点
長門有紀　８０３点
朝比奈未来　２１１点
鈴木僵尸　１４５点

召喚できたのは２０人、つまり３５人がフィールドの外にいる訳か、
というか敵味方入り乱れた満員電車のような状態だから……

ハルヒ
「いっけえーーー！！」

佐藤美穂　０点
飯島卓也　０点
紺野洋平　０点
森兵恵　０点
ＶＳ
涼宮ハルヒ　６１０点

動けない相手に容赦ない一撃を叩き込んだ。

「試獣召喚！」

早見英司　３００点

残った一人が焦って召喚した。せっかく開いたスペースを少し埋めてしまった結果。

藍原和水　２点
蒲生寿輝　０点
曾山欄　３４点
田畑栄旬　７１点
ＶＳ
涼宮春日　６１０点

少し余ったな。

藍原和水　０点

曾山欄　０点
田畑栄旬　０点
ＶＳ
長門有紀　８０３点
朝比奈未来　２１１点
鈴木僵尸　１４５点

８人をこんなに早く倒せた、これは新記録物だ。

久保
「あまり一度に出すと動けなくなって餌食になる、少しずつ長期戦でいこう」

やっぱり一教科に絞ってまとめて倒す方法らしい。ダメージの蓄積で倒すやり方は無かったから単教科の全力が出しづらい上に特攻なんてされたらたまったもんじゃない。

……これは、思った以上に辛くなりそうだ。

## 第１９話　組み手

世界史

日下部照義　３１６点
ＶＳ
涼宮春日　１９７点

桑沢友里　１８４点
ＶＳ
古泉一樹　４５点

木下優子　２６３点
工藤愛子　２０１点
ＶＳ
長門有紀　３２５点

霧島翔子　４３０点
ＶＳ
朝比奈未来　０点
鈴木僵尸　０点

我ながらよくもった方だと思う、今のような状態のエンドレス（？）組み手を延々と続けていたのだから。

周りを見渡すと今戦っている人達で終わりのようだ。これなら勝負は……

世界史

日下部照義　６点
ＶＳ
涼宮春日　０点

桑沢友里　０点
木下優子　０点
工藤愛子　０点
霧島翔子　１４５点
ＶＳ
長門有紀　１５２点

ハルヒといつの間にか古泉も倒されたが問題無く勝てそうだ。……
次の試合は予想道理でＦクラスになった。

# 第２０話　ａｌａｌａｌａｌａｌａｌａｌａｌａｌａｌａ

キーンコーンカーンコーン

始まったか。

ハルヒ

「このクラスで強いのは数人だけどその強さはトップクラスだから雑魚に慣れちゃダメよ！」

つまりそいつら以外は俺と同じ位ということか。

キョン

「なぁハル「「「「「「ａｌａｌａｌａｌａｌａｌａ」」」」」」」……」

……気のせいだ

……気のせいのはずなのに

……怖い。

朝比奈さんが声を立てずに怯えている。その姿はとても愛らしいと思うが思うだけにしておく、もしうっかり喋ったりしたら謎の軍団がやってきそうだ。

キョン
「……ハルヒ、どうする？（小声）」

ハルヒ
「二手に分かれましょ（小声）」

キョン
「じゃんけんでいいな（小声）」

ハルヒ
「うん。……じゃんけん（小声）」

グー…ハルヒ、古泉、朝比奈さん

パー…俺、長門

キョン
「じゃあ健闘を祈……（小声）」

覆面
「見ィ～ツケタ」

ハルヒ
「二人とも、ここは任せた」

覆面共
「「「「「ａｌａｌａｌａｌａｌａｌａｌａｌａｌａｌａｌａｌａｌａｌａｌａｌａｌａｌａｌａｌａｌａｌａｌａｌａｌａｌａｌａ」」」」」

……生贄？

## 第２１話　特攻

数学

島田美波　１８８点
ＦＦＦ団α　５２点
ＦＦＦ団β　７１点
ＦＦＦ団γ　６８点
ＦＦＦ団δ　６３点
ＦＦＦ団ε　７５点
ＦＦＦ団ζ　４９点
ＦＦＦ団η　５９点
ＦＦＦ団θ　７４点
ＦＦＦ団ι　５３点
ＦＦＦ団κ　５０点
ＦＦＦ団λ　８７点
ＦＦＦ団μ　６５点
ＦＦＦ団ν　６６点
ＦＦＦ団ξ　５７点
ＦＦＦ団ο　７８点
ＦＦＦ団π　３１点
ＦＦＦ団ρ　７９点
ＦＦＦ団σ　－
ＦＦＦ団τ　－
ＦＦＦ団υ　－
ＦＦＦ団φ　－
ＦＦＦ団χ　－
ＦＦＦ団ψ　－
ＦＦＦ団ω　－

ＶＳ
長門有紀　７９４点
鈴木僵尸　１６２点

キョン
「って危なっ！」

最後の７人が点数が表示する前に特攻し終わってた……ギリギリかわしたけど。

それにしてもフィールドが広い、既に四方を囲まれた

キョン
「……島田さん」

フードを被ってない女子に声をかける。

美波
「……何？」

キョン
「こんなのといて悲しくない？」

美波
「何当たり前のこと聞いてるの？」

キョン
「……そうだな」

島田美波　０点

ＶＳ
長門有紀　７９４点

ＦＦＦ団２４人　ー
ＶＳ
鈴木僵尸　１６２点

ちなみに俺は一人の動きを一瞬止めて壁にしただけで自滅特攻してくれた。

## 第２２話　一瞬

総合科目にいた二人をあっさりと長門が倒して進んでいるとハルヒ達が誰かと戦っていた。

保健体育

土屋康太　６５１点
ＶＳ
涼宮春日　０点
古泉一樹　０点
朝比奈未来　０点

…え？

キョン
「……ハルヒ……まさかあいつの点数……」

ハルヒ
「うん……多分、有紀より上だったわ」

長門以上の点を採れる人間がいたのか……。

でもハルヒ達がだいぶ削ってくれたみたい（そうでないと困る）だからこれなら。

二人
「「試獣召喚」」

保健体育

土屋康太　６５１点
ＶＳ
長門有紀　７１３点
鈴木僵尸　１４２点

勝負は文字通り一瞬だった。
相手が腕輪を光らせて高速移動した移動線上に氷の矢を長門が出して串刺しになった。
速すぎて曲がれないほどのスピードを出した相手の自滅に近い勝負だった。

## 第２３話　〇〇にしてあげる

もう一度変な軍団が押し寄せて来たが同じ方法で倒した。

２０分くらい前の出来事くらいわかるだろうに何で……

…死人に口なしか。

長門が俺の制服の袖を軽く引いてきた。

キョン

「どうした長門？」

長門

「……あれ」

キョン

「……ああ、あれか」

あれとは世界史の田中先生とクラス代表、あと知らない奴一人。生徒の二人がどちらがあれ呼ばわりされたか言い争っている、どっちもなのに。

キョン

「なぁ、そろそろ始めたいんだが」

雄二

「観察処分者のお前より頭の悪……すまん、始めようか」

観察処分者？
どこかで聞いたような気が……。

キョン
「……雑用係か」

二人
「「何で知ってるの（んだ）！？」」

キョン
「学園長って人」

明久
「あんのクソババァ！！」

雄二
「落ち着け明久」

明久
「離せ雄二、僕はいまからクソババァを殴るという大事な使命を果たさないといけないんだ！！」

雄二
「いいから落ち着いて俺の話を聞け」

明久
「……いいだろう、但しどうでもいい話だったら容赦なく売り飛ば

すからな！」

雄二
「ああいいぞ。まず先に、ババァを殴ったら手が汚れるぞ」

明久
「う……」

雄二
「だったらババァを殴るより聞かれたあいつらが口外しないように召喚獣で殴り倒せば済むんじゃないか？」

明久
「そっか、流石雄二だね」

キョン
「……とりあえず話はついたようだな」

明久
「ギッタギタにしてあげる」

キョン
「……大丈夫かお前？」

明久
「ギッタギタにしてやんよ」

キョン
「……えーと、先生」

田中先生
「あ、はい」

フィールドが出る。

3人「試獣召喚」

明「ギッタギタにして試獣召喚」

## 第２４話　同時

世界史

坂本雄二　２５２点
吉井明久　１９８点
ＶＳ
長門有紀　８１４点
鈴木僵尸　１１９点

二人
「「ブハッ！」」

長門の点数は凄いけど、リアクションするほどか？

雄二
「明久、向こうの女子は頼む。俺は雑魚を片付けたらすぐ援護する」

雑魚言うな。

明久
「無理だよ。てか点数の高い雄二がいきなよ」

雄二
「明久、お前は点数が数倍以上の相手でも互角以上に戦える操作能力がある限りお前は強い」

明久
「……わかったよ、やってやろうじゃないか」

雄二
「よし、いくぞ明久」

明久
「おうっ」

俺の相手は坂本って奴か……けど、メリケンサックってリーチ短すぎやしないか？

俺と坂本の勝負は一方的だった。

ハリセンは他の武器にはない異常なしなりからの攻撃で突きや縦の攻撃をかわしながらダメージを与える。替わりに横の攻撃は武器で防げないが、パンチの横は予備動作があるから避けることが出来る。

あと一、二撃で倒せると思った時、後ろで鈍い音がした。

長門の攻撃ではありえない音だった俺は反射的に後ろを向いた。

吉井明久　７点
ＶＳ
長門有紀　０点

……え？

負けたのか？

長門が？

雄二

「隙ありっ」

キョン

「……あっ」

気を逸らした俺は3、４回続けて攻撃をモロにくらう。

坂本雄二　１３点
ＶＳ
鈴木僵尸　１６点

まだ大したダメージを受けてなかったのと点数がかなり減ったのもあって戦死は免れた。
今度はちゃんと留めをさして後ろを向くともう相手が木刀を振ろうとしていた。
後ろを向いた勢いで流れる動作の中ハリセンで相手を攻撃して当たった瞬間

吉井明久　０点
ＶＳ
鈴木僵尸　０点

同時に戦死した。

## 第２５話　無効

ハルヒと学園長が話し合いをしている間、俺達は文月学園の生徒達と雑談をしていた。

「君達凄いよね」

「ああ、なんて馬鹿げた事を挑んだんだ？」

「そういう意味の凄いで言ったんじゃないけど」

「でもやっぱり凄いよ」

「特に一人がな」

「あの子はもはやチートだな」

「しかも見た目だって……」

「くそぉ、なんて羨ましいんだ！」

「そうだ！他の子だってＬｖが高いし……何でお前みたいなさえない奴が！？」

「そうだそうだ！俺達だってけっこうさえない方なのに」

「さえなすぎて名前が出て来ない位だよコンチクショー」

これは雑談と言えるのだろうか？

ハルヒ
「お待たせ……あれ？古泉君は？」

キョン
「……あれ？どこだ？」

長門
「……あそこ」

ああいたいた、アドレス交換していたのか。

古泉
「お待たせしましたか？」

ハルヒ
「ううん、さっき話終わったところだから」

キョン「それで、どうなったんだ？」

周りも静かになっていく。

ハルヒ
「……結果は……

……相討ちのルールはなかったからこの戦争じたいが無効になった」

「えええええええええええええええええええええ！！！！！！！！！！！？？？？？？」

まぁそうなるわな。

「何だよあれだけ頑張って何にもなしかよ！？」

「はぁ！？お前がどこで頑張ったんだよ！」

「お前が俺を盾にした時に２０秒ももったんだよ！」

「お前が頑張ったという事実の方が驚きだよ！」

「俺の２０秒を返せ！」

とりあえず良かった、無駄骨にはなったけど誰も犠牲にはならなく

てよかった。

「テメェ表に出ろ！」

「いいだろう相手になってやるよ」

よかった……よな？

ともかく俺達は帰路について５人分かれて家に向かい３０秒くらいたったころ、携帯が鳴って取り出す、メールか……

［緊急事態：大変なことが起こりました。出来る限り急いで公園に来て下さい。

古泉］

大変なこと？ハルヒがまたやらかしたのか。

でも何で俺に伝える必要があるんだ？とりあえず俺は公園に向かった。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9134o/

バカとハルヒと宣戦布告

2011年12月3日00時49分発行